

第2章 報告書の疑問点

1. 4名の生存者以外は即死であったのか?

報告書25頁には「4名を除いた他の者は即死若しくはそれに近い状況であった」との記載がある。しかし、この事故の4名の生存者らは墜落後、しばらくの間は多くの人の息づかいや話し声を聞いている。生存者の一人、落合由美さんは

『墜落直後に、「はあはあ」という荒い息遣いが聞こえました。一人でなく、何人もの息遣いです。そこらじゅうから聞こえてきました。まわり全体からです。

「おかあさーん」と呼ぶ男の子の声もしました。

次に気がついたときは、あたりはもう暗くなっていました。どのくらい時間がたったのか、わかりません。』

(中略)

『どこからか、若い女の人の声で、「早くきて」と言っているのがはっきり聞こえました。あたりには荒い息遣いで「はあはあ」と言っているのがわかりました。まだ何人もの息遣いです。

それからまた、どれほどの時間が過ぎたかわかりません。意識がときどき薄れたようになるのです。』

(中略)

『突然、男の子の声がしました。「ようし、ぼくはがんばるぞ」と、男の子は言いました。学校へあがったかどうかの男の子の声で、それははっきり聞こえました。しかし、さっき「おかあさーん」と言ったことと同じ少年なのかどうかは、判断はつきません。』

(中略)

『やがて真暗ななかに、ヘリコプターの音が聞こえました。あたりは見えないのですが、音ははっきり聞こえていました。それもすぐ近くです。これで、助かる、と私は夢中で右手を伸ばし、振りました。けれど、ヘリコプターはだんだん遠くへ行ってしまふんです。

帰っちゃいやって、一生懸命振りました。「助けて」「だれか来て」と、声も出していたと思います。ああ、帰ってゆく……。

このときもまだ、何人もの荒い息遣いが聞こえていたのです。しかし、男の子や若い女の人の声は、もう聞こえてはいませんでした。』

(中略)

『涙はでません。全然流しませんでした。墜落のあのすごい感じは、もうだれにもさせたくないな。そんなことを考えていました。そして、また意識が薄れていきました。

気がつく、あたりはあかるかった。物音は何も聞こえません。全く静かになっていました。生きているのは私だけかな、と思いました。でも、声を出してみたんです。「がんばりましょう」という言葉が自然に出てきました。返事はありません。「はあはあ」という荒い息遣いも、もう聞こえませんでした。』

落合さんは墜落後16時間以上たってから、救出された。この16時間間に生存者はかなり多くいたことは明らかで、捜索救難がもっと速く行われていれば生存者はもっと多くなっていた可能性がある。

このことは「墜落の夏」(新潮社 吉岡 忍著)の中でも指摘されている。

'85年8月16日付け東京新聞の報道では、「墜落地わかっていたのに……」と地元民 県警など取り上げず との見出しで(資料 5)

「墜落現場が小倉山だの御座山だのと言っていたのは、機動隊や自衛隊の連中だけだ。オレたち地元の住民は12日の夜から、南のスゲノ沢の方だと確信していたんだよ。なのに、(警察などは)オレたちの声を無視してあさっての方向を捜索させた。4人以外にも生存者がいたのなら夜中でも十分救出に行けたんだ!」

と生存者ら4名を最初に発見した人は語っている。

地元の関係者は、県警側は「小倉山へ向かう」と主張。地元側は「絶対に違う」と反論したが、機動隊長がガンとしてゆずらず、結局間違った方面へ捜索隊を出発させてしまったと語っている。



朝日新聞社会部の作成した「日航ジャンボ機墜落」によると、墜落地点として多くの連絡者のはっきりしている情報の中で、何故か20時8分にあった長野県警への「氏名不詳」の110番の情報、「現場はぶどう峠の長野県側(北相木村)だ、とだれもが信じた。

何故このような「氏名不詳」の情報に踊らされたのか？

この搜索の誤りの責任を追及するのではなく、このようなばかげたミスはどうやれば再発を防げるか検討する必要が事故調にはあったのではないか。

事故調のように「4名以外は即死またはそれに近い状態であった」と事実を曲げてしまったのでは、搜索救難の改善は生まれてこない。「ようし、ぼくはがんばるぞ」と叫んだ子どもの死は無駄にされている。